

『大乘法界無差別論』の菩提心思想

田上太秀

第1項 〔大乘法界無差別論〕の構成

〔大乘法界無差別論〕は法蔵の解釈でいえば、「大乘中の法界は無差別である」¹⁾と説く論書という意味のようである。法界についての説明かと思うと、漢訳の題名には一名〔如来蔵論〕となっている。

本論書には梵文原典とチベット訳本とが現存せず、漢訳本だけが現存する。大正蔵31巻に収められる漢訳2本があるだけである。経典番号1626は〔大乘法界無差別論〕1巻であり、経典番号1627は、〔大乘法界無差別論〕或名〔如来蔵論〕1巻である。いずれも著者は堅慧菩薩²⁾、翻訳者は提雲般若³⁾となっている。

この論書の内容は菩提心の12義を叙述するものであるが、題名にもあるように如来蔵を叙述した論書と言ってもいい。しかし如来蔵についての論書というには、内容が菩提心の叙述に徹底しているところから、ここに如来蔵の思想を菩提心を

1) 大正蔵44巻63頁中

2) 〔大乘法界無差別論〕(疏大正蔵44巻63頁下)に法蔵は、

堅慧菩薩者。梵名婆羅末底。婆羅。此云堅固。末底云慧。菩薩者具云菩提薩埵。(中略)於仏滅後七百年時。出中天竺大刹利種。聰叡逸群。備窮俗典。出家學道。慧解踰明。大小乘教。無不綜練。但以行菩薩兩。留意大乘。以已所遊平等法界。伝示衆生。方為究竟廻大饒益。是造究竟一乘宝性論。及法界無差別論等。皆於大乘捨離權歸實。顯實究竟之説矣。

と述べているが、実は本論書の著者は堅慧であるか、また堅意であるか、あるいは同一人物であるか定説がない。泉芳景「〔大乘法界無差別論〕解題」(〔国訳一功経〕論集部所収)、宇井伯寿「宝性論の研究」pp. 89-97、高崎直道「如来蔵思想の形成」5頁。J. Takasaki: A Study on the Ratnagotravibhaga (Uttaratantra) Being a Treatise on the Tathāgatagarbha Theory of Mahāyāna Buddhism, S. O. R. 33. Roma, p. 9.

3) 法蔵は〔大乘法界無差別論疏〕で本論書の訳者は提雲般若と述べているが(大正44蔵63巻頁下)、定かではない。

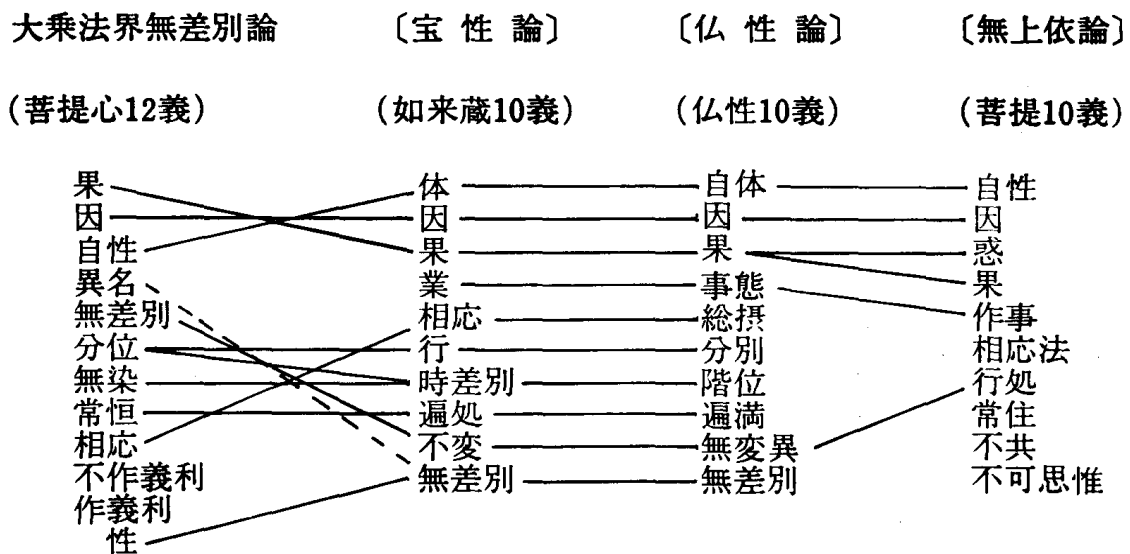
(2) 『大乘法界無差別論』の菩提心思想 (田 上)

通して叙述したものととも考えることができる。

事実、〔究竟一乗宝性論〕(以下、〔宝性論〕と略す)の成立が〔大乘法界無差別論〕より以前であって、前者の要約が後者であると見るが、その逆に後者の内容を増幅して前者が著わされたと見るか、これら2論書の成立関係は問題となるところである。いま〔大乘法界無差別論〕の成立問題は如来蔵系統經典論書の中でいまだ未解決ではあるが、〔宝性論〕の成立とほぼ同時代の成立と考えてよいのではないか⁴⁾。

いまここで問題とするのは、菩提心と如来蔵との関係であって、殆んどの如来蔵系經典の中に見られる菩提心は、如来蔵、あるいは仏性を正因とした場合に、その縁因となるというものであった。菩提心を正因として認める考えは、どこにも見当たらない。それか〔大乘法界無差別論〕においては如来蔵と密接な関わりを持つような取り扱いをしており、ここでは因位を如来蔵、果位を法身と考えその因位から果位へ展開する心を菩提心と考えている。そして因位と果位、すなわち如来蔵と法身とは、染浄の差異があるけれども、その本体は常恒、不変で無二であるので、これを法界無差別と言っている。

ところで〔大乘法界差別論〕は菩提心を果、因、自性、異名、無差別、分位、無染、常恒、相応、不作義利、作義利、一性の12項に分けて説明するが、これを12義と呼んでいる。12義は他の如来蔵系統論書、經典にも類似の内容で見ることができ、その対照表を宇井伯寿博士は次のように纏めている。



4) 如来蔵系經典、論書の成立に関する研究は高崎直道〔如来蔵思想の形成〕春秋社によって完成されたといえる。

〔大乘法界無差別論〕は他の文献と比較して順序に相違が見られて、他の三つは〔宝性論〕に順じているように思われる。〔大乘法界無差別論〕の12義を〔宝性論〕がまとめたもののようにも考えられる。

順序において、冒頭に〔大乘法界無差別論〕は果を置いているのに対して、他の三つは自性を置いている。〔大乘法界無差別論〕は果を第一義に置いて、この論書の著作目的を先ず冒頭に示したものであろう。意図的に「此中最初顕示菩提心果。令見勝利。」⁵⁾とあって菩提心の果を表示するのはいいとしても、12義全体が一つの体系的にまとめて説かれたものであるとすれば、やはり、自性、因、果という順序の方が論述の上からは落ち着くのではなかろうか。もし〔宝性論〕の要約のようなものであるとすれば、なにもわざわざ、順序を入れ換えてしまう必要などない。〔宝性論〕の方が却って〔大乘法界無差別論〕よりまとまりがあり、論述順序も無理がなく自然でさえある。

また〔大乘法界無差別論〕の偈頌とその注釈と、〔宝性論〕のなかでそれに類似する偈頌と注釈とを対照してみると、〔大乘法界無差別論〕の菩提心12義の各々は、〔宝性論〕の如来蔵10義の内容⁶⁾と順次すべて一致するものではなく、出入りがあり重複する箇所がある。〔大乘法界無差別論〕は前述来のように、12義の項目の配置が、「果、因、自性、……」と果を頭初に挙げているが、その配列は衆生のためにまず果を示し、勇猛心を奮い立たせるようとする善巧方便によるものであろう。おそらく論理的筋道を立てて組織体系を最初から試みたものではなかったと考えられる。

対照した内容を一瞥しただけでも分かるように、〔大乘法界無差別論〕の菩提心12義各々の内容に重複があり、文章が冗長であり、整理すべき箇所がないわけではない。

〔大乘法界無差別論〕は〔宝性論〕の概要を述べたような内容のようであるが、これが〔宝性論〕成立の前後のいずれにおいて成立したものか、あるいは同時に成立したものか、決定することはむずかしいといわなければならない。いま、これら両論書の成立問題について深く立ち入って論ずることは本論文の目的から反るので、これ以上考察することを避けたい。

5) 大正蔵31巻892頁上。異本では（大正蔵31巻894頁上）、特に果を冒頭に置いた理由を記述していない。この文は翻訳者の付加したものか。

6) 〔宝性論〕（大正蔵31巻835頁上）

(4)

『大乘法界無差別論』の菩提心思想 (田 上)

〔大乘法界無差別論〕の12義と、〔宝性論〕との比較をした限りでいえば、〔大乘法界無差別論〕の内容は菩提心12義というには、あまりにも如来蔵の説明に始終している憾がある。敢えて12義を分析していえば、宇井伯寿博士のそれに従えば、前掲の表のように果、因、自性、異名、無差別の5義が菩提心の説明になっている。

勿論、ここでは菩提心が如来蔵と同意義、同性とまで見ていると言ってしまうと、12義はすべて菩提心の説明内容と考えられないこともない。しかし菩提心を如来蔵と同義、同性として即座にみなす考え方は、いままで如来蔵系統経典の中にはどこにもなかったことである。本来、両者の出自を見れば本質的にその自性も行相も相違するものである。如来蔵系統の立場からは菩提心は正因たる如来蔵、あるいは仏性にとっては縁因といったはたらきをもつものにすぎなかった。それは〔涅槃経〕の中にはっきりと謳っていたのである。

いま、〔大乘法界無差別論〕が如来蔵と菩提心とを同義、同性として考えているとすれば、一体、如来蔵の顕現はいかにして成立するのか。凡夫が成仏するための条件はどのように考えればよいのか。いずれも大きな問題としなければならない。

つぎにさきに述べたように前の5義について、その所論を考察してみることにしたい。

第2項 菩提心の5義

(1) 四諦の滅義としての菩提心

菩提心が求め続けて得る結果は何かという問いに対する解答をまず最初に挙げている。

「果」とは、すべての煩惱が消滅した、寂靜の涅槃の境界であり、それは唯仏与仏のみがよく知るところである。なぜならば、唯如来のみが一切煩惱を消滅したのであるからという。

為菩提心果。謂最寂靜涅槃界。此唯諸仏所証。非余能得。所以者何。唯仏如来能永滅一切微細煩惱熱故。

その涅槃の境界は新たに創造され、取得した境界ではなく、いままで煩惱に覆われ、汚染されていた心境界が転じて清浄法身なる本来の姿に転じた、いわゆる転依の相である。まさに不思議の法身であると述べる。

彼果者即涅槃界。何者為涅槃界。謂諸仏所有轉依相不思議法身。

寂靜涅槃界は具体的にどのような煩惱習気を滅尽したのか。これについて6患を離れた果であるという。

無生永不復生意生諸蘊故。無老此功德増上殊勝圓滿究竟無衰變故。無死永捨離不思議變易死故。無病一切煩惱所知障病及習氣皆永斷故。無苦依無始時無明住地所有習氣皆永除故。無過失一切身語意誤犯不行故。(大正藏31卷892頁中)

ne jāyate na mriyate bādhyate no na jīryate, sa nityatvād dhruvatvāc ca śivatvāc chāśvatatvaḥ // 80 //

na jāyate sa nityatvād ātmabhāvair manomayaiḥ, acintyapariṇāmena dhruvatvān mriyate na saḥ // 81 //

vāsanā-vyādhībhiḥ sūkṣumair bādhyate na śivatvataḥ anāsravābhisamskāraiḥ śāśvatatvān na jīryate // 82 // (THE RATNAGOTRAVIBHAGA MAHAYANOTTARATANTRASĀSTRA, ed. by E. H. JOHNSTON p. 105)

6患とは生、老、病、苦依、過失をいい、これら6種の過患をはなれたところを涅槃界と説いている。

〔宝性論〕では一切衆生有如來藏品第5の第9不変異の善淨位に

不生及不死。不病亦不老。以常恒清涼。及不変等故。此偈明何義。偈言。以常故不生。離意生知身故。意恒故不死。離不思議退。清涼故不病。無煩惱習故。不変故不老。無無漏行故⁷⁾。

と述べているのが類似している。

ここでは無苦依、無過失の叙述はないが、これらの叙述は〔宝性論〕の如來藏10義中第3果義において述べられる。ただ、上2論の引用中、本論書で無苦依とは無始時來、無明住地のあらゆる習気が皆永く断滅しているがゆえなり、とあるのが、〔宝性論〕の「清涼故不病、無煩惱習故。」とあるのを解釈した文に、

「本後際來清涼をもつてのゆえに不病である。無明住地の所攝を離れているからである。」

pūrvāparāntam upādāya śivatvān na punar badhyate 'vidyāvāsa-bhūmi-parigraheṇa. (前後際をとるが、寂靜であるから、無明住地の攝をもつてしても、また病むことはない。)⁸⁾

7) 〔宝性論〕(大正藏31卷835頁上中)

THE RATNAGOTRAVIBHAGA MAHAYANOTTARATANTRASĀSTRA, ed. by E. H. Johnston, and seen through the press and furnished with indexes by T. Chowdhury, Patna. 1956. (Abrev. "RATNAGOTRA") p. 105.

8) 〔大乘法界無差別論疏〕(大正藏14卷65頁中)には、この離6患を第一、第三を離報障、

(6) 『大乘法界無差別論』の菩提心思想(田 上)

と述べるところは共通している。〔宝性論〕では、〔大乘法界無差別論〕の苦依、すなわち根株無明住地、及び習気がすべて苦依所となるのを病と見ている⁹⁾。

〔宝性論〕と対照してみると6患とはどうも生、老、病、死の4患と無明の患とにまとめられるようで、考えて見るに四諦の苦諦と集諦との2諦を指しているように思われる。

苦諦の生、老、病、死の4苦と、集諦の無明が、ここでの6患である。とすれば、苦、集の2諦を離れたところがまさに涅槃界、つまり滅諦に他ならない。苦集の2諦を離れ、滅諦を望む心の働きとして菩提心があり、それは道諦に相当すると言えよう。

このように分析して見ると、〔大乘法界無差別論〕の12義の果の叙述は四諦を骨格としている点が指摘されうる。

では道諦としての菩提心の性格は何か。これについて次に4義に亙って述べることにしたい。

(ロ) 4種の性格をもつ菩提心の因義

因位の菩提心を三つの比喩をもって説明する。

復次菩提心如_レ地。一切世間善苗生長所_レ故。如_レ海。一切聖法珍宝積聚処所故。如_レ種子_一。一切仏樹出_二生相統之因_一故¹⁰⁾。

これらの比喩はすでに〔入法界品〕の中において叙述されたものばかりで、内容についても大同小異にすぎない。〔入法界品〕では118相の比喩をもって示したものを、わずか三つだけを挙げたにすぎない。

これを偈頌に

能益_二世善法。聖宝及諸仏_一。所依宝処因。如_二地海種子_一¹¹⁾。

菩提心は善法、聖法、諸仏などが依止とするもので、それらの宝処であり、出生

第二を離業障、第四、第五を離惑障、そして第六を離誤犯障とし、この離4障が涅槃界、即ち一般的果である、という。

9) 〔大乘法界無差別論〕(大正蔵31巻892頁中)

10) 〔大乘法界無差別論〕(同上)

11) 〔大乘法界無差別論疏〕には地喩を縁因、海喩を出因、種子喩を法身にみれば了因、報独、化の二身にみれば生因となるが、菩提心は仏果の生因であり、仏果は菩提心種子によって生まれるから、これを真生因とする、と説明する。ここのところをそこまで読み取るほどのことはないと考える。というのは〔入法界品〕の118相のうち、わずか三つだけを取って一面を述べたにすぎないのであるから、これをこのように分析することは行き過ぎであろう。

する根源であると述べている¹²⁾。

地喩、海喩、種子喩の三つは各々次第に所依、積聚処、因という3相を意味するが、比較の上から考えると、〔宝性論〕、〔仏性論〕にある如来蔵の3蔵、つまり次第に所摂蔵、隠覆蔵、能摂蔵に通ずるもののようである。ただちに如来蔵の3蔵に相即すると解釈するには、〔大乘法界無差別論〕の説明は不十分であるので、一致するとは言い難い。ただ論理的に対照する点はあるとだけいうに止めたい。

その因位にある菩提心はどのような性格を持つものか、その所説によると、菩提心はちょうど転輪聖王の王子のようなものと前置きして次のように説明をしている。

転輪聖王となるために教育を受ける王子は、王法を学び、それに絶対の信頼をおいて学習する。それと同じように仏法を求めさとりを目指す菩提心の心のはたらきは、深く仏法を信ずることがなければならない。菩提心はその意味で、種子のようなもの、またその性格を持つといわなければならない。

また、王子は単なる知識だけでなく、諸事万端に、つまり対応、処置、統治に至るまで万事に通達すべきで、その智慧を得なければならない。それと同じく菩提心も衆生済度に当たり、智慧が一切に通達したものでなければならない。菩提心はこの意味で母のようなもの、その性格を持つものでなければならない。

王子は将来、王となり善政を布かなければならない。そのためにはつねに定めてすべての善法に通じ、その中に処し、生き、心の安定を得ているべきである。それと同じように菩提心は将来成仏するために善法を知り、それを体現することに心を定め、散佚しない状態をつねに保っていなければならない。

菩提心はつねに善法を実現することに専注している三昧の状態になければならない。その意味で菩提心は胎蔵に譬えられ、その性格を持つといわなければならない。

また王子は人民の生活の安定を計ってやらなければならない。そのためにつねに王子は人民への憐愍の心を失ってはならない。そのためにつねに王子は人民への憐愍の心を失ってはならない。済度することに怠惰であったり、嫌厭の心を持つものは王としての資格を失う。王子はそれを学ぶべきである。それと同じように菩提心はつねに生死海に沈淪する哀れな衆生を済度するために嫌厭、怠惰の心

12) 〔大乘法界無差別論〕（大正蔵31巻892頁中）

(8) 『大乘法界無差別論』の菩提心思想 (田 上)

が起こってはならない。

また悩める衆生の行状、心情を知る。その悩みを円満解決して上げなければならない。その事業を成就するに大悲の心を生起するのが菩提心である。この意味で菩提心は乳母に譬えられ、その性格を持つといわなければならない¹³⁾。

これまでの説明を偈頌に次のように表している。

信為其種子 般若為其母
三昧為胎藏 大悲乳養人

これは〔大乘莊嚴經論〕第5に

種子勝。信大乘法為種子故。生母勝。般若波羅蜜為生母故。胎藏勝。大禪定樂為胎藏故。乳母勝。大悲長養為乳母故¹⁴⁾

dharmādhimuktibijāt pāramitāsreṣṭhamātrto jātaḥ /
dhyānamaye sukhagarbhe karuṇā saṃvardhikā dhātrī // 11 //¹⁵⁾

(法に対する信解を種子となすから、波羅蜜多という最勝の母から生じ、禪なる楽を胎とするにおいて、大悲が養育の乳母である。)

とある四義、それと帰依品第3に、善生の四義——1. 菩提心を種子、2. 般若を生母、3. 福智二聚を胎藏、4. 大悲を乳母——¹⁶⁾を叙述する偈頌などを併せて引用したものであろう。両論の叙述内容には、菩提心の4種の性格を主体にした点以上に及んでいない。

〔大乘莊嚴經論〕の4種法説の引用と考えられる〔宝性論〕の如来藏10義中、第2因の本偈頌に、

信法及般若 三昧大悲等¹⁷⁾

とあり、この偈頌の積に

闍提及外道 声聞及縁覚
信等四種法 清淨因応知¹⁸⁾

icchantikānām tīrthānām śrāvakāṇām svayambhuvām /
adhimukty-ādāye dharmās catvāraḥ śuddhi-hetavaḥ // 33 //

四種衆生を挙げ、これの対治法として信等の4種法があると述べている。その引

13) 〔大乘莊嚴經論〕(大正蔵31巻596頁中)

14) 〔大乘莊嚴經論〕(大正蔵31巻593頁中)、

15) MAHĀYĀNA-SŪTRĀLAMKĀRA, par Sylvain Lévi. (Abrev. MSAL) p.15.

16) 〔宝性論〕(大正蔵31巻828頁中)

17) 〔宝性論〕(大正蔵31巻828頁下)。“MSAL” p.53.

18) 〔宝性論〕(大正蔵31巻829頁中)。Ibid., p.53.

用するところの4種法を偈頌に

大乘信種子 般若以為母
 禅胎大悲乳 諸仏如実子¹⁹⁾

と説明する。

〔仏性論〕では、

一信楽大乘。二無分別般若。三破虚空三昧。四菩薩大悲²⁰⁾。

などの4種法を挙げており、〔宝性論〕と同様、4障、すなわち4種衆生は4種法によって対治される、と述べる。

また4種法を修習するによって、無上法身の清浄波羅蜜多を得るが、このような人を仏子と名付ける。また仏子に因、縁、依止、成就の4義がある、と説く²¹⁾。

上の〔宝性論〕、〔仏性論〕の4種法説は、4障（4種衆生）の対治法として叙述されており、一方、〔大乘莊嚴経論〕、〔大乘法界無差別論〕では、4障とは無関係に一般的に論じられている。とりわけ、〔宝性論〕と〔大乘法界無差別論〕との4種法説の偈頌の註解は一致していない。

い）本性は離染消浄相の菩提心自性義

仏性を求め、悟りを求め、さらに苦海にありながら一切衆生を済度しようと誓願を立て、修行する菩薩の心のはたらき、つまり無上菩提を求める心のはたらきは、その本性は何かは大乗仏教教徒たちが始終考えていた問題である。

すでに述べた通り、人の本性は清浄なる仏性を持っている。そしてその本来の本覚の上において、人の心は働いているのだが、客塵煩惱に汚染されて、本来の輝きを失い、迷惑していると大乘經典は教えている。菩提心はその本来清浄なる仏性としての心が開顕するための縁となるもので、菩提心に催されて仏性は菩提へ向かうというのである。

ここではこの菩提心さえも本来清浄であり、仏性と同義とさえ思えるような叙述がされている。

前項で、4種の性格を持つ菩提心はすべての世間の善法、聖法、そして仏法を出生し、それらの依止となると述べたが、その菩提心は2種の特相を持つと説いている。

19) 〔仏性論〕（大正蔵31巻797頁中）

20) 〔仏性論〕（大正蔵31巻798頁上）

21) 〔大乘法界無差別論〕（大正蔵31巻892頁下）参照のこと。

(10) 『大乘法界無差別論』の菩提心思想 (田 上)

偈頌に

自性無染著 如火宝空水
曰法所成就 猶如大山王 (大正蔵31卷892頁中)

自性無染著と自法所成就というのは、菩提心の自性の2面を表わしている。

自性無染著とは離染清浄相をいう。ここでこの偈頌についての〔大乘法界無差別論〕の解釈を紹介しよう。

離染消浄相とは菩提心の自性は不染であり、客塵煩惱障を離れると本来消浄の相になるところをいう。これを比喩を用いて、火、摩尼宝、虚空、水などが次第に灰、垢、雲、土に覆われると、隠れて染著されたかに見えるが、それが取り除かれると、それぞれのものは本来の清浄を取り戻すという²²⁾。

菩提心も同様に本来清浄な自性であるのが客塵煩惱に染著されている。それは如来蔵そのものが染著されているという意味に理解されるべきかどうか。もしそうであるとすれば、如来蔵がその煩惱を除去しようとして、それから離脱しようとして動き出した心のはたらきそのものを指して菩提心と見るべきであろうか。

如来蔵の向上相、つまり煩惱に覆われている姿から離脱しようとする心の相を菩提心と見れば、この菩提心の自性も本来清浄であると理解することはできる。

つまり如来蔵が本来性を開顕するための縁因として菩提心があるのではなく、如来蔵自身の向上相として、自己開顕のはたらきの相として菩提心の相を考えたものが、この離染清浄相であろうと思われる。

その自己開顕のはたらき、すなわち向上の相としてつぎの白法所成相があるのではないか。

白法所成相とはいま述べたような自性清浄の心、つまり如来蔵が向上相として顕現し、一切の白浄法を出生する。つまり一切白浄法の依止処となることをいう。

別の言い方をすれば、一切の仏法の所依止となるわけだが、同時に菩提心は一切法をもってその本性としている。たとえば須弥山が衆宝を出生するというが、

22) 比喩を挙げるのに、〔仏性論〕は別相の3性を宝、虚空、水界に譬えて、〔宝性論〕は3種義を宝、空、水で譬えるのに、〔大乘法界無差別論〕では、火、宝、空、水の4比喩を挙げて、火の比喩が付加されている。また〔仏性論〕では如意功德性を宝に、無異性を虚空に、潤滑性を水界に、各々同相として譬え (大正蔵31卷796頁下—797頁上)、〔宝性論〕では、所思の義を成就する等の威力の自性を如意珠宝に、不変異性の自性を虚空に、衆生に対する悲愍の潤沢の自性を水に、各々譬えている (大正蔵31卷828頁中)。だが、〔大乘法界無差別論〕では火、宝、水の4種清浄喩の同相の性を説いていない。この点でも具体性に欠けている。

それは須弥山が衆宝で構成されていることを意味するのと同じ考え方である。

さらに発展して、白法所成相は結論として言えば世間の善法、聖法、仏法を生ずる。そしてそれらの所依止となると同時に、それらによって構成されている心の相をも言っているわけである。

〔参考〕

離染衆生相と白淨所成相との2相の考え方は〔仏性論〕において、仏性(=如来藏)の自体相を通相の自性清淨心と²³⁾、別相の如意功德性、無異性、潤滑性²⁴⁾とに分けて、仏性の自体を明かす思想に相通ずる。

如意功德性とは、中に如来藏、正法藏、法身藏、出世藏、自性清淨藏²⁵⁾の5藏があるとし、如意宝珠を得れば、随意に叶うがごとく、仏性(5藏)を得れば、果を成就することができるという。

無異性とは、凡夫、聖人及び諸仏とに差別なく、すべてに平等遍満することと虚空のようであることをいい、潤滑性とは、如来性が衆生界中において、般若を本質とする大悲をもって衆生を済度することにおいて滞ることがないという意味である。通相の自性清淨心とは、如来性が煩惱中であっても染汚されないことをいう。

上の〔仏性論〕の所説は、自性清淨相は仏性の本質であって、別相の3性は、その働きかた、すなわち実践的に菩薩が因位の修行から果位に達するまでの過程におけるはたらきを説いているものと考えられる。〔宝性論〕では、〔大乘法界無差別論〕の前半偈頌に相当する半偈頌が、如来藏10義の第1自性の本偈頌で説かれている。すなわち、

自性常不染 如宝空淨水
(信法及般若 三昧大悲等²⁶⁾)

sadā-prakṛty-asamkliṣṭaḥ śuddha ratnāṃbarāmbuvat / 30 /

(常と自性と不染とは清淨な宝と虚空と水とのようである)

如来藏の自体について、自体、常、不染を挙げ、自相と同相とによって、如来法身の3種清淨功德を表わそうとしている。

23) 〔仏性論〕(大正藏31卷797頁上)

24) 〔仏性論〕(大正藏31卷796頁中)

25) 〔勝鬘經〕自性清淨藏品(大正藏12卷222頁中)

「世尊。如来藏者。是法界藏。法身藏。出世間上上藏。自性清淨藏。」が原文である。

26) 〔宝性論〕(大正藏31卷828頁中)

(12) 『大乘法界無差別論』の菩提心思想 (田 上)

また〔宝性論〕の積偈頌等を考察しても、〔仏性論〕の内容は一つ一つがより一層詳細であり、〔宝性論〕がこの点に関する限りでは、〔仏性論〕の内容を受けて論理を組織したということができよう。

(二) 阿羅漢となる菩提心の変成

菩提心は成仏位に至ったら、やはり菩提心というのか、これに対する解答がこの異名義である。

偈頌に

至_二於成仏位_一 不_レ名_二菩提心_一
名為_二阿羅訶_一 淨我樂常度 (大正蔵31卷892頁下)

成仏位に達すれば、もう無上正等菩提を求めることはないので、菩提心という心のはたらきはない。したがってその位の心は菩提心とは呼ばないで、それは阿羅漢の位に達した心というべきである。

つまり三界の見、思の煩惱を断じて尽智を得、学ぶべきことがすでになく、世間において供養を受けるに値する位に至り着いたものが阿羅漢である。ここに菩提心という心のはたらきはなく、その心のはたらきによって至り着いた境地であるから、それは菩提心とは名付けられないという意味である。

この偈頌の表現するところでは、この内容は小乗仏教的な考え方といわなければならない。大乘仏教では阿羅漢は仏位より低い階位と考え、劣位の聖者と決め付けているにも拘わらず、ここには成仏位と同じに取り扱っている。この一事をもって考えると、〔大乘法界無差別論〕の著者は阿羅漢果の意味を従来の大乘仏教の取り扱う意味として見ないで、仏果位のそれと理解したものと考えられる。

偈頌には阿羅訶という成仏位は淨我樂常の4種の波羅蜜多が円満したところに得られた階位と述べている。

一般に大乘仏教菩薩は六波羅蜜多を成就し、成仏位を得るといわれるが、〔大乘法界無差別論〕はこの六波羅蜜多についてとくに成仏のために修行すべき徳目として挙げ、叙述したところがない。十波羅蜜多の語句は一度だけ(大正蔵31卷893頁上)菩薩の修行徳目として指摘されているだけで、それを詳述しているわけではない。

〔大乘法界無差別論〕は六波羅蜜多、あるいは十波羅蜜多に代わって淨我樂常の四波羅蜜多を菩薩の修行徳目とした点で、大きな特色を持っている。

この特色を認めるとすれば、菩提心は六波羅蜜多を修行するのではなく、淨我楽常の四波羅蜜多を修行することを修行の根本としているといわなければならない。いままで菩提心と六波羅蜜多、十波羅蜜多との関わりが強調され、両者のはたらきを持つものが菩薩と呼ばれていた、ところが波羅蜜多——菩薩という関係がここでは崩れ、菩提心——淨我楽常の四波羅蜜多——（菩薩？）——成仏という関係が成立することになる。

四波羅蜜多を修行徳目として前面に押し出したことは、〔大乘法界無差別論〕は如来蔵思想の系列に連綿することから、〔涅槃経〕を筆頭に〔勝鬘経〕などに強調されている四波羅蜜多がそのまま受容されていると見なければならない。

偈頌を注釈するところでは

此菩提心。永離_二一切客塵過患_一。不_レ離_二一切功德成就_一。得_二四種最上波羅蜜_一。名_二如来法身_一。

と説明し、続いて〔勝鬘経〕の文章²⁷⁾を援用して、

如_レ説。世尊如来法身。即是常波羅蜜。楽波羅蜜。我波羅蜜。淨波羅蜜²⁸⁾。

と述べている。

要約して言えば、如来法身とは菩提心が円満した当体をいい、それは阿羅漢とも表現されている。そして如来法身は布施等の六波羅蜜多の円満した当体ではなく、淨等の四波羅蜜多の円満した当体である。

〔大乘法界無差別論〕のこの偈頌に相当する偈頌を〔宝性論〕に求めると、如来蔵10義中第3果の偈頌に

淨我楽常等 彼岸功德果²⁹⁾

(厭_レ苦求_二涅槃_一 欲_レ願_二等諸業_一)

phalārthaṃ karmārthaṃ cārabhya ślokaḥ /

śubhātma-sukha-nityatva-guṇa pāramitāphalaṃ / // 35 //

(淨我楽常は波羅蜜多功德の果である。)

また如来蔵10義中第10無差別の偈頌に

法身及如来 聖諦与_二涅槃_一

功德不_二相離_一 如_レ光不_レ離_レ日³⁰⁾。

上の偈頌の注釈文に

27) 〔勝鬘経〕（大正蔵12巻222頁上）

28) 〔大乘法界無差別論〕（大正蔵31巻892頁下）

29) 〔宝性論〕（大正蔵31巻829頁中），“RATNAGOTRA” P. 57.

30) 〔宝性論〕（大正蔵31巻835頁中）

(14) 『大乘法界無差別論』の菩提心思想（田 上）

有_二四種名_一。何等為_レ四。一者法身。二者如来。三者第一義諦。四者涅槃³¹⁾。
と述べているのがそれに当たるであろう。

いずれの偈頌，そして釈文をみても〔大乘法界無差別論〕のような菩提心が成
仏位に至って阿羅漢になるとは述べていない。阿羅漢の語はあくまでも小乗仏教
の用語であって大乘仏教の用語ではない。この一点を見て〔大乘法界無差別論〕
の菩提心思想は四諦に基づく原始仏教の思想を基台にした所説ではないかと思わ
れる。

また異名義の後半の一偈頌は因位における異名を述べている。

偈頌に

此心性明潔 与_二法界_一同体
如来依_二此心_一 説_二不思議法_一（大正蔵31卷892頁下）

菩提心の本性は本来清浄であるから，仏性界と同体であるという。

〔不増不減経〕の文章³²⁾を略出して、

如_レ説。舍利弗。此清浄法性即法身。我依_二此自性清浄心_一。説_二不思議法_一³³⁾

と解釈している。

法蔵はこの文章と〔大乘法界無差別論〕の趣旨とをまとめて、〔大乘法界無差
別論疏〕において、

此法性即是法界。亦名_二真如_一。或云_二實際等_一。我依_二此等類_一故。約_二無染義_一。説名_二性
浄心_一。約具恒沙仏沍徳義。説名_二不思議法_一也³⁴⁾

と述べている。

法蔵は敢えて、性浄心（自性清浄心）＝法界と不思議法という二つの異名を立
てたように解釈しているが、それは拡大解釈としか考えられない。この偈頌でい
えば菩提心は心体本浄であるから、本来、法界と同じである。その意味で法界と
は菩提心のことだと言っている。つまり因位の菩提心はまた法界の異名でもある
という考え方である。

この菩提心の解釈に立って叙述したものがつぎの無差別義である。また分位義
も同じである。分位義の釈文に

31) 〔宝性論〕（大正蔵31卷835頁下）

32) 〔不増不減経〕（大正蔵16卷467頁中）

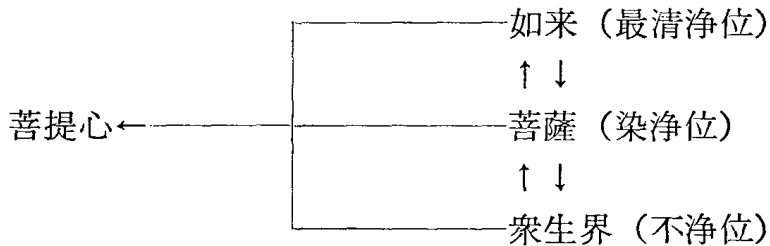
〔舍利弗。我依此清浄真如法界。為衆生故説不可思議法自性清浄心。〕の略出。

33) 〔大乘法界無差別論〕（大正蔵31卷892頁下）

34) 〔大乘法界無差別論疏〕（大正蔵44卷67頁中）

此菩提心。無差別相故。不淨位中名衆生界。於染淨位名為菩薩。最清淨位説名如来。(中略) 舍利弗。衆生界不異法身。法身不異衆生界。衆生界即是法身。法身即是衆生界。此但名異非義有別³⁴⁾。

と説明している。表示すると



衆生界といえ、菩薩といえ、如来といえ、すべて菩提心の現われにすぎない。菩提心が苦集の2諦に所在するところを衆生界と名付け、道諦に所在するところを菩薩となづけ、滅諦に所在するところを如来と名付けているにすぎない。菩提心の異名とはこれを指している。

第3項 まとめ

菩提心12義と謳った〔大乘法界無差別論〕はその内容を見ると、やはり如来蔵を異名とした菩提心を説明したものと考えてよい、

すでに考察したように12義中、前半の4義、あるいは第6分位義までをもって菩提心思想の叙述と考え、そこに焦点を絞って考察を進めてきた。

この前半の叙述は四諦を土台にした論理の組み立てであるように見られる。内容についての要約は重複するので省略するが、問題となるのは、12義全体に通じて言えることであるが、菩提心、つまり上求菩提下化衆生としての心のはたらきについて、すでに過去の経典などに叙述されたようなものが見当たらないのである。

菩提心の因縁、その功德、効用などについての説明がない。なぜ菩提心を生起するのか、発菩提心したら、煩惱はどのようにして滅尽し、そこにさとりが顕現するのか、発菩提心したらなにを修行するのか。これらについて具体的な説明がない。道諦の説明と思われるところで、四波羅蜜多が六波羅蜜多の代わりに出ていたが、これはどちらかといえば、果徳であって、六波羅蜜多の修行のようなさとりにへの因縁としての修行ではない。

ここの菩提心は如来蔵の向上相として説かれた心のはたらきにすぎなかった。

35) 〔大乘法界無差別論〕(大正蔵31巻893頁上)